

将軍の園芸癖が花開く！



日本盆栽作家協会代表幹事

山田登美男

江戸時代の文化文政〜嘉永期に盆栽、園芸関係が大きく花開いている。

私の祖先の初代庄之助、二代目初五郎の時代、根岸の里や下谷近辺でサクラソウ（桜草）の品評会が行われていたそうで先代の三代釜次郎が古老に聞いた話などまとめてみました。

園芸の楽しみが庶民まで広がり、と楽しみ方の興じる人々が現れるよう、俳諧や狂歌などの集まりと同様、江戸の園芸はこの国にもないような特異な展開をたどっている。

盆栽のほかにサクラソウ（桜草）、オモト（万年青）、マツバラ（松葉蘭）、セッコク（長生蘭）など愛好家の間で熱狂的なブームを呼んだらしい。

また品種改良が進み、サクラソウは天明〜寛政年間（1781〜1801）下谷周辺で流行し、旗本、御家人ら武士から町人まで広く流

行が及んだようです。その品種は100種にも上って、すさまじい栽培ブームを起し盆栽やおも同等は浮世絵師が「オモト図」やその他多くの作品を作って世に残している。

流行が流行を呼び投機の対象になって驚くべき高値が付けられ、一鉢が百両、二百両も珍しくなかつたという。

大阪で二千三百両（約一億円）の値が付いた例を平賀蕉斎は記している。別名「百両金」と呼ばれたのも高値売買のためである。

四谷在住の旗本、水野忠暁などが奇品栽培の中心人物であったらしい。

私共の初代、二代目などは、よく浅草の雷門付近で夜店に出たらしく、オモトなどを扱い失敗をし、以後流行品は絶対に扱わないことが家訓となっている。いわゆる「不易流行」の教訓である。

しかし、こうしたつながりが爛



オモトをテーマにした浮世絵
豊原 国周 Kunichika Toyohara (1835-1900) 作

熟した園芸文化を生み出す母体となり、伝統文化となり江戸時代の園芸は高い教養に支えられた芸術と考えられるのです。

現在、サクランウはさいたま市の花に制定されており、更に平成22年度には桜区の花にも制定されて楽しまれています。

また、同区内の田島ヶ原に国指定の特別天然記念物として、サクランウ（約150万株）があり、ノウルシなど多くの貴重な野草と共生する形で自生していて、3月に芽を出し、4月頃まで多くの人々を楽しませてくれている日本の花です。

